

えのきど すわはらいせき 榎戸・諏訪原遺跡第5地点発掘調査 現地説明会

1. はじめに

朝霞市内には、遺跡が発見される可能性の高い場所（周知の埋蔵文化財包蔵地）が69箇所あります。このような地域で土木工事を実施する際には事前に試掘調査を行い、その結果、埋蔵文化財の所在が確認された場合には、保存措置を講じます。そのひとつとして、発掘調査を実施して、遺跡の詳細な記録を保存する方法があります。今回の現地説明会を行う地点では、区画整理事業に先立ち、遺跡の記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。

発掘現場は、かつて生活をしていた人びとの足跡を実際に目にすることのできる唯一の場です。当時の人びとが残してくれた貴重な文化財をこの機会にじっくりとご覧ください。

2. 遺跡の立地

朝霞市のほぼ中心にあり、標高約24mの台地の上に位置します。北に約500mで黒目川に臨む崖線に至り、崖線との比高差は約14mです。崖線には湧き水もあり、旧石器時代（約3万年前）から人びとが生活していました。奈良時代（約1300年前）には新羅郡（平安時代には「新座郡」と名称が改められました）が建郡され、その範囲は現在の朝霞市・新座市・志木市・和光市に及んでいたようです。

3. 榎戸・諏訪原遺跡

これまでに4箇所の発掘調査がなされ、縄文時代、平安時代の遺構（堅穴住居跡や溝跡などで地面を掘り込んだ穴として残っています）や遺物（土器や石器などで腐らずに残った道具）が確認されています。第4地点の堅穴住居跡では、凝灰岩の切石を使用したカマドがありました。

4. 榎戸・諏訪原遺跡第5地点で見つかったもの

①縄文時代（今から約5000年前）の落とし穴（1基）

垂直に掘られた穴の大きさから、かなり大きな獲物をねらっていたことが推測されます。

②平安時代（今から約1100年前）の堅穴住居跡（2軒）

そのうちの1軒は、焼失した住居（火事にあったり、家の解体時に燃やしたりするなどした住居）で、床の上からは炭化材（炭になった木材）が出土しました。炭化材は壁際から中心に向かって倒れた状態であることから、住居の構築部材の一部のようです。また、土師器や須恵器などの食器や調理具、刀子（小さな刀）・鉄鏃（弓矢の矢の先に付ける鏃）・紡錘車（糸紡ぎの道具）などの鉄製品も出土しました。

③江戸時代以前の溝跡

時代が不明な溝跡も含めて29条確認されています。溝の多くは2条が並行して延び、途中で直角に折れ曲がることから、区画溝としての役割があったようです。溝からは、鉄銭の寛永通寶や火打ち金、煙管の吸口などが出土しています。

④その他の遺構

土坑（機能を特定できない穴）や柱穴が多数見つかっています。

⑤その他の遺物

縄文時代の土器や黒曜石製の石鏃、中世以降の陶磁器などがみつかっています。

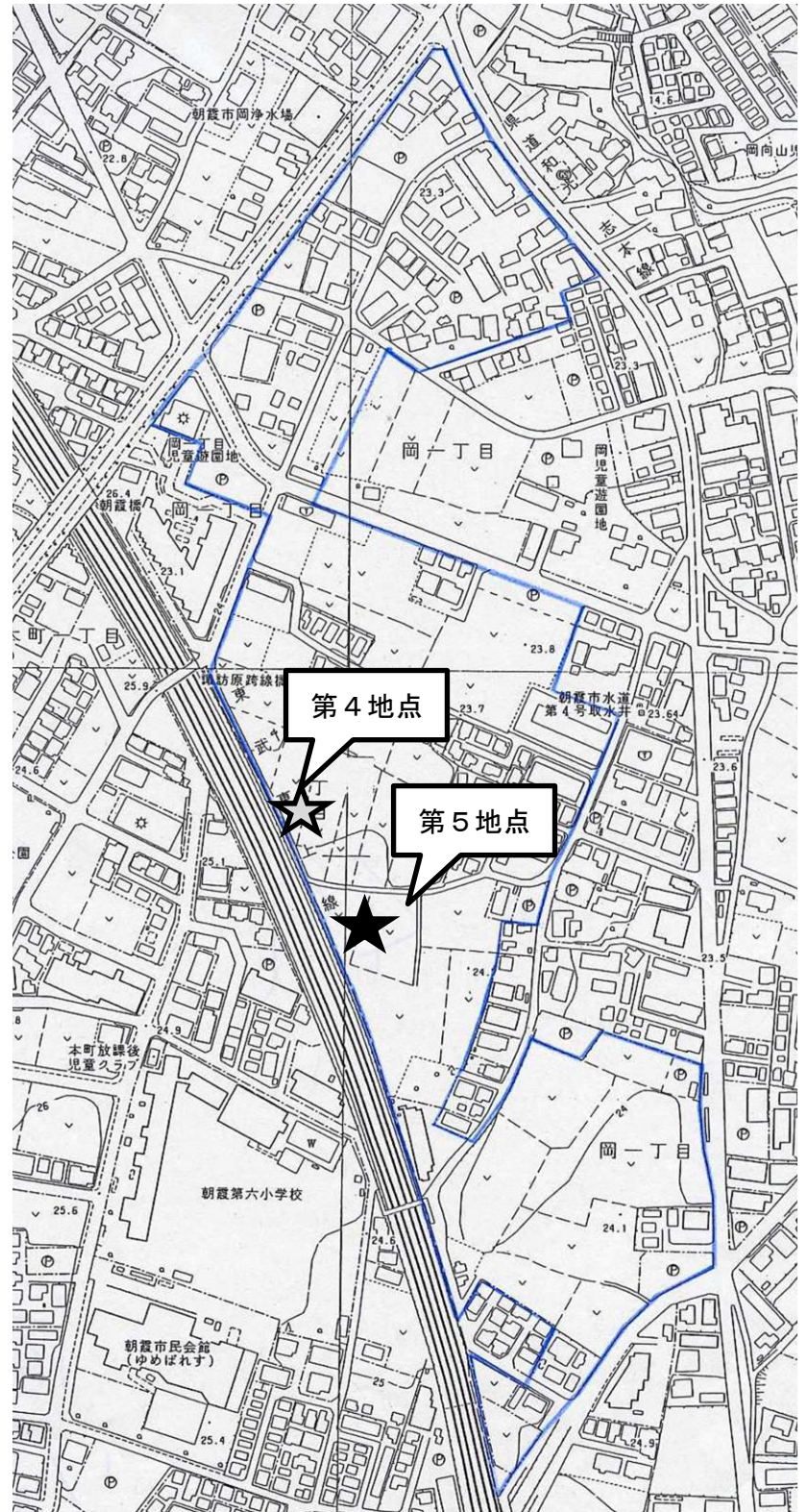
5. 調査成果

縄文時代の落とし穴や石鏃から、この辺りで狩猟生活をしていた人々と、猪などの大型獣の存在が想像されます。

調査区の北寄りでは堅穴住居跡が発見され、周辺の調査成果とあわせてみると、平安時代には堅穴住居が点在していた集落の姿が見えてきました。焼失した住居跡には、構築部材が炭化して残っていたことから、堅穴住居の屋根構造を考えるうえで貴重な事例となりました。須恵器や土師器、鉄製品も複数出土し、様々な道具を手に入れて使用していたことがわかりました。

複数確認された溝跡は、江戸時代にはすでにこの土地が区画されて利用されていたことを物語っており、調査地の一角の稻荷神社に寛文九年（1669年）の銘の石神が祀られていることもその裏づけとなるでしょう。

今後は、発掘調査で得られた成果をもとに、出土資料や図面・写真の整理と分析を行い、遺跡の状況を復元していきたいと思います。





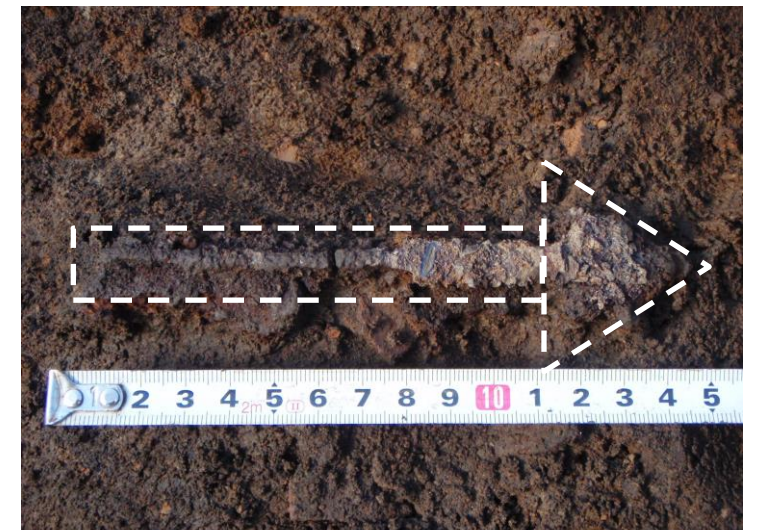
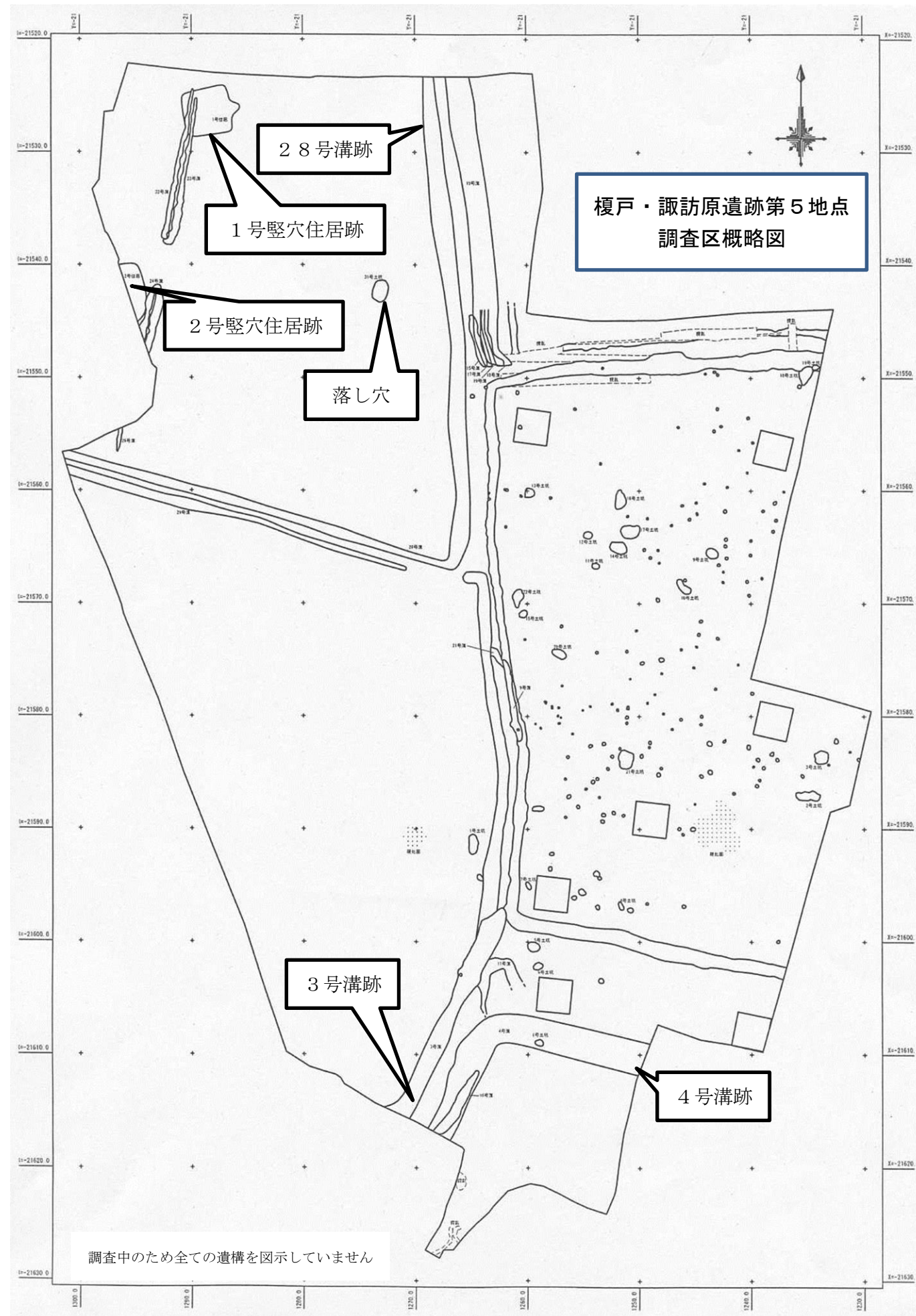
70点以上の炭化材が壁際から中心に向かって倒れた状態で出土した1号竪穴住居跡。



1号竪穴住居跡の床（土間）上から出土した炭化材と須恵器。



1号竪穴住居跡のカマドのそばから、つぶれて割れた状態の土師器の甕が出土しました。



1号竪穴住居跡のカマド近くの床上から出土した鉄鏃。三角形の刃も良く残っています。



28号溝跡から出土した鉄銭の寛永通寶。さびのために文字は不明瞭です。



第5地点で確認された溝跡の中で最も深い4号溝跡。深さ1m以上。